

教科教育学方法論における回帰的アプローチの可能性*

佐々木 洋

The Prospect of a Recurrent Approach to Teaching-Methods Courses

Hiroshi SASAKI

ある分野の学問の方法論を論じる場合、まずその分野において何らかの業績をあげ、そのあとで行なうのが一般の順序であろう。しかし教科教育学という分野はまだ発足して間もない故、そのような一般の順序に従ったのでは、方法論について論じられる機会が、ずいぶん将来にのびることになる。そこで、教科教育で行なわれている実践の中ですでに確立したものを基盤として、教科教育学研究の方法を構築してゆくというアプローチの可能性を以下に検討することにした。

I. 本論文における「回帰的」の意味

I-1 回帰的研究法の例

- a. 数学はその方法論として、回帰的（数学的）アプローチが可能であり、実際に成果をあげている。
数学基礎論では、帰納関数の導入による超数学（証明論）の算術化がなされた。
- b. 歴史学はその方法論として、回帰的（史的）アプローチが可能である。
歴史の研究法の史的変遷の研究を行なうという方法論が可能である。
- c. 医学は比喩的な意味でのみ、その方法論として回帰的（医学的）アプローチが可能であろう。
医学の研究法の具合の悪いところを直すという研究が考えられる。そのような研究をする人は国を医する「国手」である。

I-2 回帰的研究方法が可能でないと考えられる分野の例

- a. 心理学方法論 [NDC : 140・16]
- b. 倫理学方法論 [NDC : 150・1]
- c. 地理学方法論 [NDC : 290・116]
- d. 社会科学方法論 [NDC : 301・6]
- e. 政治学方法論 [NDC : 311・16]
- f. 法学方法論 [NDC : 321・16]

* 1974年11月2日受理

- g. 経済学方法論 [NDC : 331・16]
- h. 財政学の方法論 [NDC : 341・16]
- i. 社会学方法論 [NDC : 361・16]
- j. 言語学方法論 [NDC : 801・016]

以上の例においては、A 学を研究する方法として A 学的に研究するということが、意味を持たないか、不可能である。

II. 方法論としては、回帰的アプローチのほうが、非回帰的アプローチより望ましい

II-1 理論の斉一の面から

回帰的アプローチではその学問自身の方法を用いるので、理論がすっきりする。

II-2 学問の主体性の面から

上記と同じ理由で、他の分野とを区別する特色が明確となる。

II-3 学問の成果と研究方法との双利共生の面から

その分野での成果をさっそく研究方法としてとり入れ、また他方その分野での研究方法が他でも有効であることがわかれば、その分野での成果の信頼性を強化することができる。

III. 教科教育学において、方法論としての回帰的アプローチとは何か

III-1 教科教育を学習指導案（教案）のバック・グラウンドとしてとらえる

教員養成における理論と実践との接点が教案である。そして理論の側から教案に最も密接な位置を占めているのが教科教育である。

III-2

教科教育学において、教案の構成の原理およびその実際を研究方法のひな型とする。

III-3

教科教育学研究法として、回帰的（教科教育学的）アプローチとは、教案の構成の原理およびその実際を研究方法の手本としてとり入れたものである。つまり等価方程式において A_0 として教案をとり、 B_1 である教科教育学方法論を構築してゆくことである。

IV. ひな型としての教案と教科教育学研究方法との対応

（〈 〉内は対応するもの）

IV-1 単元のねらい

0.〈研究対象となるまとまり{ユニット、ブロック、セット、サブシステムなど}を、選定する。〉

- i. 単元の意義
- ii. 単元の目標分析
- iii. 系 統

〈他のユニットとの関係〉

- iv. 社会の動静と教材との関連
- v. 単元教材のとらえかた
- vi. 内容の考察と教材研究

〈他の学問の分野での研究方法で、活用できそうなものの点検〉

- vii. 子どもの能力の実態把握

〈研究対象の現状 {そしてもしできれば, 内部構造}, および研究者側の能力の限界の大まかな見つもり〉

IV-2 本時のねらい, 本時の位置

〈現時点における研究の位置づけ {3年程度}〉

IV-3 展開, 実際

〈研究のタイム・スケジュール {30年程度}〉

IV-4 指導上の留意点

〈研究上予期される問題点とその対策—勇み足 (研究に対する反撥の発生), 人材・資金不足への対策〉

IV-5 評価~到達目標

〈研究上予想される成果, および目標や計画とのずれの検討〉

V. 単元をサブシステムとして含むシステム階層

(IV-1-0の展開)

- S₀: 単 元 (ユニット)
- S₁: 学年 (発達段階による指導上の心がまえのちがい)
- S₂: 内容の区分 (例えば理科では,
 - 生物とその環境
 - 物質とエネルギー
 - 地球と宇宙)
- S₃: 教科としてのねらい
- S₄: 各学校種でのねらい (一般学校と特殊学校)
- S₅: 各学校段階でのねらい

S₆: 公教育としてのねらい

S₇: 国家としてのねらい

VI. 日本国としての目標の考察

(V-S₇の展開)

VI-1 島としての特色の例

- | | |
|---------------|--------|
| a. 観 光 | |
| 景観（さんご礁） | 奄美大島 |
| 食べ物（ナガラメ） | 馬毛島 |
| 露天温泉 | 硫黄島 |
| 気候（海水浴） | 与論島 |
| 学術（ロケット・センター） | 種子島 |
| b. 特 産 物 | |
| 屋久杉 | 屋久島 |
| 桜島大根 | 桜島 |
| アシタバ | 八丈島 |
| マルバサツキ | 諏訪之瀬島 |
| c. 加 工 | |
| 大島つむぎ | 奄美大島 |
| d. 人間移出 | |
| ハワイ移住 | 沖縄 |
| e. かなめ石の位置として | |
| 気象レーダー | 種子島 |
| 航空管制レーダー | 対島 |
| 無線中継所 | 中之島 |
| 軍事基地 | 伊江島 |
| f. 場 所 | |
| 石油基地 | (枝手久島) |
| 原子力船母港 | (離島) |
| g. 教 育 | |
| 海洋開発技術学校 | 甌島浦内湾 |
| 術科学校 | 江田島 |
| 青年の家 | 〃 |

h. 宗 教

大山祇神社	大三島
ミニ八十八ヶ所	小豆島

VI-2 島として歓迎する訪問者とは

- 島に活気をもたらす人
- 手間がかからない人
- 子どもに対し、よい影響を残す人

VI-3 島として活気があり、しかもおちつきのある日本国をめざすなら、教育や宗教の持つ吸引力を活用するとよい

- 島にいる人的資源を十分に活用できる。
- 島にある物的資源を多く消費しないですむ。
- 島外から物的資源を大量には輸入しなくてすむ。

VII. 島の教育の特色を教科教育学研究の出発点とする

(IV-1-0 を参照)

- 出発点として、なるべく簡単なサブシステムを研究の対象に選ぶことが、その後の研究の大発展の基礎となる。(例：バクテリオフェージによる遺伝の研究)
- 等価方程式における ϵ が、{地球} \approx {日本} \approx {対象となる島} の三者に存在するであろうという仮説をたてる。(IV-1-i・ii を参照)

VIII. 他の学問分野での研究方法および研究成果で活用できるかもしれないもの

(IV-1-vi を参照) [II-1 との関係が問題になるかもしれないが、IV で教案をひな型に決めているので、以下はあくまで骨格としてのひな型に対する肉づけである。]

VIII-1 メタと名のつく研究分野

- 証明論 (超数学)
- 言語工学 (超言語)

VIII-2 構造に関する分野

- 構造化学
- 原子核物理学
- 素粒子物理学
- 構造言語学

VIII-3 システムに関する分野

- a. システム工学
- b. 情報工学
- c. 都市工学（特に都市計画）
- d. モデル論
- e. ワーク・デザイン（デザイン・アプローチ）

VIII-4 地域に関する研究分野

- a. 文化人類学
- b. 一般意味論（その土地の風土・慣行の持つ意味を読みとるという点で）

VIII-5 発想に関する研究

- a. 等価変換理論
- b. K J 法
- c. 創造工学

IX. 研究のタイム・スケジュール

（IV-2・3を参照）

- i. 候補地となる島さがし（3年）
- ii. 二、三ヶ所にしぼる（2年）
- iii. プリテスト（4年）
- iv. 本テスト（3年）
- v. 一段上の二、三のシステムへの適用のプリテスト（3年）
- vi. 同上本テスト（6年）
- vii. 二段上のシステムでのテスト（9年）

X. 研究上の留意点

（IV-4を参照）

- a. 外部資本を入れていない地域をさがす。
- b. まずは鹿児島に近いところからさがす。

XI. 評 価

（IV-5を参照）

当面の研究対象は小さい島での教育となるので、ここで得られた成果から、教育の島として国外に点在している海外日本人学校について、何かを説明・予測することができる、ということを目指

とする。

Ⅷ. 遺訓の進化

和魂漢才 }
和魂洋才 } ⇒ 和魂外才 ⇒ 吾魂其才 ⇒ \circ 魂十才 ⇒ \oplus (円を三個たがいに垂直に組みあわせたもの)

参 考 文 献

- 1) 古谷龍一「ワークデザイン」昭和40年6月刊(日刊工業新聞社)。
- 2) 北川敏男「情報学の論理」昭和44年9月刊(講談社)。
- 3) 田上小学校研究同人「基礎能力を育てる学習指導」昭和49年6月刊(同校)。
- 4) 日本図書館協会「日本十進分類法新訂7版」昭和36年4月刊(同会)。